

『白い大陸への挑戦 日本南極観測隊の60年』(神沼克伊著)

最近、コロナウィルスの影響で山へも行けない無聊を慰めがてら「三密」度の小さい書店のジュンク堂によく行くが、先日その本棚の片隅で偶々眼に入った本を紹介したい。

年配の皆さんなら記憶されていると思うが、南極観測が始まったのが65年程前のことで、その第1次越冬隊の隊長であった西堀栄三郎著『南極越冬記』がベストセラーになったのが60年程前のことであった。ご存知の通り西堀栄三郎は「雪山讃歌」を創った人でもある。

のっけから私事で恐縮であるが、本屋などと言う店も無かった（今も無い）草深い山奥で育った私は、当時2年生であった高校の図書室に入荷した『南極越冬記』を借りて読んでからすっかり南極ファンになり、できることなら南極観測隊に入ってみたいと思うようになった。

それで、南極観測隊に入るには、地球科学の研究者になるか、伝統ある某々私立大学山岳部OBから観測基地設営隊員として参加するか、或いは気象観測隊員として気象庁から派遣されるかの方法があることが分かったが、前二者はアタマもカネも無い小生には全く及ぶところではなく、残るは何とか気象庁に潜り込むことであった。

当時の中央省庁に就職するには、まずは国家公務員甲種上級試験なるモノに合格し、次に希望する官庁の入省庁試験を受けるという寸法であった。私は雑学は得意だったから、公務員試験の内の一般教養と外国語の試験はルンルンであったが、専門の部の試験（私は理学部物理学科の学生であったので物理学で受けた）は恥ずかしながら問題の意味すら分からず、スゴスゴ・コソコソと試験会場から逃げ帰ったのであった。そういう具合で、“南極”は私如き怠け学生には身の程弁えない馬鹿な夢であることを思い知らされた誠にお粗末な一巻であった。

さて、余分な前置きが長くなった。ここに紹介する本も、半世紀に亘って南極観測に関わり、南極に滞在すること15回、越冬観測も2回経験している地震学者の著者が、還暦を迎えた南極観測の歴史、日本の南極観測との関わり、南極観測の成果とそれがもたらす地球の新しい知見などについて一般読者にも寝転んで読めるように分り易く書き下ろした本である。

南極（正確な地点名で言えば地球磁石の南端が地表面に出てくる地点である南磁極）では、我々が山で使っているコンパスの磁針はどう動くか？ 毫釐したアタマでそれでも必死になって考えた答えは“南磁極では全ての方向が磁方位の真北に向いているので磁針はクルクル回って一定しない”というものであったが、実はこれは得点はゼロ点（マ、正しい答えは小学校の理科の教科書に書いてあるそうだから、お孫さんにでも聞いて見て下さい）。因みに、方位が分からないと南極を歩き廻っている観測隊員はロストポジションになって全員遭難死する筈であるが、今までにそのような遭難事故は起こっていない。

また、南極では太陽はどの方角から昇るか？ 時期によっては西からも昇るそうだ。日本隊が先鞭をつけたオゾンホールが発見もここ30年ほどのことである。南極と言っても、我々はことほど左様に何も知らないのであるから、この本は門外漢の我々にも大いに知的興味を掻き立たせてくれる。

本の内容の性質上、専門用語も若干登場するが、南極観測の始まりから現在までの観測体制や観測内容の変遷、基地での生活の変化などが寝ころんで読める。還暦を迎えた南極観測事業の“履歴書”でもあろう。コロナ禍で家に閉じ込められているこの機会に是非一読を・・・。

2015年11月、現代書館刊 本体1,800円

(酎、2020年5月記)

